

## 旧陸軍登戸研究所見学記

### 一宮海岸発射の風船爆弾 一百聞は一見にしかず

一宮町制 120 周年記念行事の一つとして、風船爆弾を研究開発した秘密の研究所跡を訪ねた。風船爆弾は 67 年前に一宮海岸などからアメリカ大陸へ発射され、数 100 個の爆弾・焼夷弾が太平洋を越えた。3 か所の発射基地の中でただひとつ第 1 回目から発射に成功した一宮町として、また「非核平和宣言の町」の美しい塔が駅前に立つ町として、意義深い記念行事であった。

3 月 11 日午前、満員のバス「いちのみや号」は、川崎市多摩区明治大学生田キャンパス内の旧陸軍登戸研究所跡へスムーズに着いた。現在の明治大学平和教育登戸研究所資料館である。この資料館は、地元川崎の高校生をふくむ多くの市民・研究者による長い間の調査、研究、保存運動によって、去年 3 月に発足した。その時から見たかったこの資料館の見学を、町の 120 周年行事として平和を守る会の方々が企画・実現して下さった。町長、町民ともども熱心に見学した。(帰りに幕張で、東北太平洋沖大地震—東日本大震災—に出あった。スタッフの時間管理と運転手さんのお蔭で早々に帰宅できた)

昭和 19 年 11 月 3 日に一宮海岸で水素ガスをつめて発射した風船爆弾は、とても複雑な兵器であった。同じ日、茨城県大津海岸、福島県勿来(なこそ)海岸の二基地では、地上爆発して数名の死傷者を出した。中学生の時、発射後の風船爆弾を見た町の 13 区の方々のお話も興味深かった。そのお一人がバラスト(沢山の砂袋)をよく見るようにといわれた意味が、見てからわかった。

1 万メートル上空に吹く偏西風を利用して太平洋 8 千キロメートルを 50~70 時間かけてわたった風船爆弾は、沢山の物を麻縄 19 本で吊り下げていた(①15 キロ爆弾、②4~5 キロ焼夷弾 2 個、③高度を保つ装置、④爆弾投下装置、⑤浮力回復用砂袋多数、⑥その投下装置)。この風船爆弾は、精密機械装置であることが、模型を見てはじめてわかった。陸海軍内外の優れた科学者たちの長年の研究成果であった。

風船爆弾のアイデアは昭和 8 年ごろからあったという。昭和 14 年には、和紙とコンニャク糊の気球が陸軍兵器行政本部の研究者によって数多くつくられていた(中国の旧満州に研究部隊がおかれた)。

昭和 19 年に、大本営は、米本土空襲の決戦兵器として風船爆弾による攻撃作戦準備を始めた。千葉気球連隊が動員された。連隊本部は茨城県大津におかれ、その第 2 大隊が一宮におかれた。

昭和 19 年 2~3 月に一宮海岸で、直径 10 メートルの風船 200 個による実用試験が行なわれた。高度調節用の砂袋を投下するための導火索が低温低圧のため導火しなかつたので改良した。この試験には、参謀本部、陸軍省、兵器行政本部から関係者が多数訪れて、現地で全体会議を開いた。そしてその秋からの大規模な「ふ」号作戦実施を決めた。この決定会議の場所は一宮の何処であったのだろうか。

明大学生食堂での昼食もそこそこに、もう一度資料館へ行った。そこで伴繁雄氏保管の石井式濾過器の濾過筒などの展示を再び見た。伴氏の貴重な遺著「陸軍登戸研究所の真実」(扶桑書房出版 2010 年新装版)を知り、買って帰りくりかえし読んだ。

そして、この著書に導かれてこの報告を書いている。

“弥心（やごころ）神社”（現生田神社）が近くにあるとバス仲間に教わり、走って見に行った。「知恵・発明の神」（八意思兼神、やごころのおもいかねの神）を祭ってあるという。（新宿区にあった陸軍科学研究所から分けてまつた）。人間を殺すための秘密兵器＝謀略用独創的毒物などを発明し動物のみならず悲惨な人間までの実験をして、その殺傷効果を研究した知恵とは何であろうか。

一宮海岸などから発射した風船爆弾に、この毒物を積む計画があった。アメリカの牛を殺すための牛の伝染病原ウィルスの分離に成功し、その病原菌を乾燥する研究と感染させる実験にも成功していた。この牛疫病毒粉末を風船爆弾に積んで実戦に応用できると参謀本部の会議で意見が一致した。（結局は報復を恐れ実行しなかった）。

広辞苑には「風船爆弾に効果はなかった」と出ている。しかしそうであろうか。当時の「気球爆弾」は、昭和19年11月から20年3月までに3基地から9,300個発射されて、数100個はアメリカ本土に到着した。アメリカでは、原因不明の爆発事故、山火事、不発気球、砂袋などを化学または細菌兵器と想定し、すでに牛疫生ワクチンを作り出していたという。そして登戸研究所の細菌兵器などの研究は、戦争犯罪とされずにアメリカに引きつがれたのである。

一宮・大津・勿来海岸発の風船爆弾は、中国・朝鮮・日本で研究実験し、さらに一宮海岸で実験された加害のための秘密兵器であった。直径10メートルという巨大な風船が運んだ物は、爆弾・焼夷弾であったことを改めて学んだ。明治大学平和教育登戸研究所資料館は、小田急線の生田または向ヶ丘遊園にある。ここで戦争中の極秘研究内容が無料で公開されている。秘密戦、謀略戦のための生物化学兵器、電波兵器、風船爆弾、中国紙幣の偽札などの展示には、驚き、興味がわいてくる。日本軍の加害の事実を示す展示物を目の前にすると、その責任について人間として考えさせられる。そして地元川崎の人たちが「戦争遺跡」の見学会を重ね、当時の登戸研究所勤務員に出会い話を聞いたこと、登戸研究所の疎開地の一つ長野県駒ヶ根市の高校生が伴繁雄氏をくりかえし訪ねて「君たち高校生にだけは話しておきたい」と語ってもらったことに、大きな希望を感じる。

また町民たちでくりかえし見学したいと思う。

（2011.3.30. 由井 鈴枝）